連載・イベント

ふるさと Something NEWS

第42回

記録をつくるプロセス&アウトカム
――大いなる誤解の駆動力

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人 efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼記録をつくるとは?

安倍晋三前総理は、首相在職2822日など数々の記録を残して、菅義偉新総理に移譲した。おそらく今後、その記録は破るのは困難だろうとの判断で、病気を理由に突然のバトンパスになったと思われる。政治は結果といわれるが、それは歴史に記録されるものであり、プロセスと時間経過が関わる。本稿では「記録」に触れながらコメントしたい。

記録更新を宿命として課せられているのが、スポーツ選手である。特に、時間へのチャレンジである競技、例えばマラソン、100㍍走、水泳競技などは、タイムが勝敗を決める。1位、2位の順位はあるが、ラップタイムが競われ、記録となる。陸上の100㍍の10秒の壁は、すでに破られている。

記録を破るとは記録をつくるともいわれる。つくるとは、創作行為であり、プロセスが重要になる。

▼野球にみる プロセスと記録

プロ野球をみて感心することがある。高校野球も同様ではあるが、プロ野球の醍醐味は、白球を追う連携プレイにある。

小さな白い球がピッチャーの手を離れ、それ自身がある宿命を帯びてバッターの振るバットとの出会いを得、新たな軌飛跡を描く。それを観て、内外野手、さらには走者もが動く。全員の目線と行為が小球に支配される。そして、誰かのミットに納まり一コマが終わる。その繰り返しが、ドラマを生み出し、勝負を決し、記録が生まれる。野球の世界では、長嶋茂雄を除き、ドラマを作ろうとしてもできるものではないだろう。

しばしば、暗黙知の実例にイチローのような技が例示されるが、それは訓練によって身に着いたものであり、偶然が奇跡のようになされるものである。その結果が、記録となる。「記録」はrecordであり、「記録する」はrecording となる。記録するは「記録を破る」とも言われる。

最近のスポーツ記事を取り上げると、大相撲の正代が優勝し大関となった。大関昇進には、前の三場所で32勝を上げることが基準となっており、実は1勝だけ足りなかったが、日頃の勝敗と優勝の実績で、大関昇進の花を添えた。こうして新たな記録となった。これは、結果と共にプロセスが重視される例である。

▼写真の撮影と記録

別の例で、「記録」について考えてみたい。20年も前のこと、筆者が勤めていた大学の研究室でお世話になった教授が定年を迎えた。同窓会誌に思い出を寄稿して頂くことになり、顔写真を筆者が撮ることになった。カメラを構え、ファインダーを覗いた。その小さな四角のフレームの中に見えたものは、その教授の一生が反映した「顔」であり、外観の表情の中に浮かぶ内面が明確に、にじみ出ていた。一瞬の出来事ではあったが、ファインダーの上に「昇華」という言葉が現れていた。

それは、おそらくその教授と筆者との関係が、カメラを構えたことによる出来事であった。それは、写真をみる観察者のそれぞれによって異なる記録となり、記録は主観であるともいえる。例えば、図書館は、あらゆる記録の収蔵庫である。が、大事なことは、その記録の活かし方である。

▼プロセスの違い ―技術と技能

筆者は、技術史や技術史教育の研究をしていたが、後述するように「技術」と「技能」について定義したことがある【註1】。

一般に、技術は、科学技術を前提としてものづくりに用いられることが多い。しかも、新技術とか、先進技術のように、ポジティブな対象として言われる。しかし、技術は、ものづくりに関わるのではなく、自動車の運転技術、翻訳の技術、あるいは読書や語り、さらには作文や校正などにおいても、技術とされる。したがって、冒頭に述べた政治も技術の対象とされる。

筆者は、技術とは、「経験を通して獲得した対象行動への優れた適応力」と定義した。この定義で、「経験」「対象行動」「優れた適応力」が要となる。技術は、経験から生まれる。技術には、目的である対象がある。そして、技術は、優れていなければならない。ただの試行錯誤（トライ&エラー）の所作や方法は「技術」とは言わない。何かを成し遂げようとするときの最適で要領を得た方法が、技術であり、その背景には、科学（一部重なるが科学技術）が裏打ちされているのが望ましい。技術は、経験が前提とされるのは、時間を要するのは構わない。むしろ、目的とする結果が大事となる。

次に、類似の言葉に「技能」がある。技能は、技術に比較して軽視されることが多いように思われる。しかし、本当は、「技能」の方が、即時性という面において、技術より優れている。筆者の定義によれば、技能とは「経験や訓練により獲得された対象行為への瞬時の達成能力」である。技能の場合には、「瞬時」が要件となる。

例えば、旋盤作業では、高速回転する被加工物（ワーク）に刃物（バイト）を当てて削るときに、ゆっくりと作業することはできない。瞬時に適切に仕上げる必要がある。

同時通訳も、例えば英語を日本語に翻訳するのに次々と発せられる言葉を、あとで言い直すことはできない。英検が、「実用英語検定技能」と言われる所以がここにある。

このように行動がすべて時間的に前向きで、後追いや後処理では都合がつかない作業や業務が「技能」であることが多い。ゆえに、技能は決して技術に比べて劣るものではなく、むしろ瞬時対応や処理することが課せられた高度技術をさすともいえる。

▼プロセスとアウトカム

技術や技能という「技」が、勝敗を決め記録をつくる。その記録をつくるために、技術開発や技能訓練を行う。こうして、技術や技能の働きが、従来の状態や状況を変え、新しいステージ（新局面）を作り出す。その結果が、記録を塗り替えるという結果や成果を生み出すことになる。最近、そうした結果や成果を「アウトカム」というが、プロセスあっての結果となる。

新エネルギー利用やエネルギー開発などを目的として行われるプロジェクトでは、対応する新技術が明確なイノベイションとして導入される。これは新技術であり、目標設定に向かって取り組みや方法に時間を掛けることができる。これは、政治の判断や施策によるところが大きいのであるが、明らかに技能とは異なるものである。

繰り返しになるが、新エネルギーを適用する政治や取り組みは技術であり、記録が重視される。それは、進歩や改善への土台になるからである。高い目標値の設定とその進捗の記録は、それを破るためばかりでなく、事態を適切に推移させるために必要なデータである。

事態を順調に進行させるために用いられる面白い表現として、「大いなる誤解の駆動力」という言葉があり、次のようなものである。

未発達の幼児は、生きるためにミルクを必要とし、それを与えてくれる人に、可愛い笑顔を与える。笑顔をみるとますますそれに答えるために、ミルクを与える。この連鎖は、笑顔によって誘導された原因と結果の連鎖である。しかし、この笑顔は楽しい、嬉しいから笑うのではなく本能として発せられるもので、「新生児微笑」ともいわれる【註2】。

野球の場合、白球が味方も敵方も行動を導く指針となる。その指針（白球）は行動を明確にするツールであり、明確な駆動力となる。この場合、白球は笑顔であり、記録をつくる。それには、技術や技能がともなう。

さて、新エネルギーの分野においても、さらに地域やふるさとにおいても、「笑顔」や「白球」がもつ役割を「記録」が担うこともある。それらを、「大いなる誤解の駆動力」としてさえ、期待したい。

【註1】「技能」について の一考察、佐藤建吉 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmetsd/2009/0/2009_77/_pdf/-char/ja

【註2】はいチーズ！clip https://clip.8122.jp/41448/